
大きな秘密、小さな秘密

永島園子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大きな秘密、小さな秘密

【Nコード】

N2197BA

【作者名】

永島園子

【あらすじ】

アンドレアス・ノイマンには、幼いころの記憶が無い。命の恩人で主のロベルトは賢王の誉れ高い人物だった。アンドレアスは主を心から尊敬し真心を込めて、日夜侍従としての職務に励んでいる。王の覚えもめでたく、貴族たちにも一目置かれる存在となったアンドレアスには……特別な秘密があった。

侍従・1（前書き）

R15は保険です。

侍従・1

贅を尽くした寄木細工の床に白大理石の柱、部屋の真ん中には巨大な四柱式ベッドが有り、そのわきには繊細な細工を施された猫足の机と椅子、部屋の隅の赤々と火が燃えている暖炉の前には高価な絨毯が敷かれ、その上に繻子張りの優美な寝椅子が置かれている。

若い小柄な侍従は暖炉の火を見つめながら、主のいない寝室で泣いていた。

真面目で仕事熱心であるから、仕えている王が不在でも王の許しなく椅子に座ったりベッドに腰掛けたりなど、決してしないのだ。侍従は王に仕えて五年になる。もともとは王の治める国の人間では無かった。九歳のころ飲まず食わずで戦場でさまよっていた所を、運よく王に拾われたのだ。侍従は命の恩人で主で、武芸や学問の師匠でもある「国王陛下」を心から尊敬していたし、感謝もしている。実際まだ青年といってよい年頃の国王は優れた政治家で、国一番の武人でもある。女性関係がかなり放埒でだらしない事を除けば、尊敬できる人物で、気前は良いし、思いやりも有る。実際、若い侍従は王を……ほとんど崇拜していると言っても良い。

「陛下、僕は……」

侍従は暖炉の火を見つめながら、知らず知らず大きな黒い瞳から、涙を流し、すすり上げていた。以前はこんな事は無かったのだが、この所、主がどこかの女性のもとに出かけて留守となると、ついこのように涙が出てきてしまうのだ。困った事に。

主の留守中、寝ずの番をしるなどと命じられている訳では無い。自室に下がって休めば良いのだが、主が無事に戻るまで心配で心配で、とても眠れないのだった。

かつてはどこに行くにも何をするにも、侍従は王の供をしたものだが、一昨年から愛人やなじみの娼婦の所を訪れる時は、供を命じられなくなったのだった。厳つい体つきの護衛三人は相変わらず供をするのに、自分だけ外された事が心外だったが、侍従という立場ではそのような事を主に向って言うべきではないし、実際、侍従はその件に関して何も王には言っていない。

こうした場合、通常は王は朝食の時刻まで宮殿に戻らない。だが、その日に限って何がどうなったのか侍従には分からなかったが、気が付くと自分は暖炉の前の寝椅子に寝かされていたのだ。泣き疲れて眠っていたらしい。大きなベッドには主が一人で眠っていた。耳を澄ますと健やかな寝息がかすかに聞こえる。それを聞くと侍従は心からホッとした。自分の体には王が微行の際に愛用しているコートが掛けてあった。恐らく王が掛けて下さったのだと、侍従は理解した。王が愛用している香水の香りがほのかに感じられる。この香りは、どこか深い森の奥の清らかな泉のほとりを侍従に思い起こさせる。深みがあつて謎めいていて爽やかで胸の奥がざわめく、そんな魅力的な薫りを味わってから、主のコートを型崩れしないように丁寧に付属の衣裳部屋に収めておく。

先ずは自分自身の身支度を直さねばいけない。顔を洗い、髪をとかして黒いリボンで結ぶ。下着はすべて新しいものに着替える。下着は重要だ。ことにこの侍従のように秘密を持つ者には。

下着類はすべて白い。シャツも白いが、後は黒づくめだ。タイも上下の仕着せも靴下も靴も。侍従の目も髪も黒いので、それに合わせるようにと言う王の意向なのだ。ただ一つ、王が昨年与えた勲章だけが華やかな色合いを放っている。宮中に潜り込んでいたスパイ組織を摘発した功績によるものだ。それ以降、若い侍従は「黒の侍従」とか「黒い懷刀」とか言われて、権勢を誇る貴族たちにも一目置かれ、恐れられるようにもなった。王は貴族に任じるつもりだったが、自身の領地や召使の管理など役目を果たす上で鬱陶しいだけ

だと言うような事を言つて固辞した。そして、これからもただ身近で仕えたいと強く願つた。貴族の中には、真実それが侍従の願ひであるのかについては疑う者も有つたが、王は若い侍従の願ひを理解してくれた。

邸や領地を頂かない代わりに、宮殿で王の私室に最も近い部屋を賜つた。そして若い大貴族の子弟の歳費に相当する年金を支給して下さっている。それで十分すぎるほどだと侍従は思っている。

王が目覚めたとあれば、他の者達にも呼び鈴を鳴らして知らせ、まずはうがいと洗顔の介助である。整髪と髭剃りは王専属の理髪師に任せる。衣装の着付けだが、下着の着替えは専属のメイド二人と三人がかりで素早く行ふ。襟付きのシルクのシャツを着せ、ズボンや靴下を穿かせ、クラバットを結び上衣を着せるのは侍従の役目だ。

「やはり、お前が結ばないと襟元が決まらないな」

「恐れ入ります」

毎朝、ほぼ同じ言葉を互いに繰り返しているが、王が自分のクラバットの結び方を氣に入ってくださっていると云うのは、侍従に取つて非常に重要な事なのだった。そして、その言葉を殆ど合図のようにして、理髪師とメイド二人は王の御前を退出する。入れ違いに朝食が運ばれてくるのだ。毒見も侍従の重要な役目であつた。

まずは、王が食事の最初に飲む澄み切つたコンソメスープを一匙、王自身のスプーンですくつて毒見用の小さなカップに入れてもらい、飲む。王自身のスプーンに毒を仕込む場合もありうるから、この手順は省けないのだ。

「これは美味そうだな」

王自身の手で、黄金色に輝くオムレツを真ん中から二つに切り、

ひとかけらを毒見用の銀食器に乗せる。侍従は恭しくいただき、咀嚼音その他のぶざまな音を立てないように万全の注意を払って優雅に美しく毒見をするのだ。これで王のナイフフォークにもオムレツにも毒が無い事がはっきりする。

「まことに結構でございます」

「そうか」

同様の手順でハムなどの加工食肉、魚の燻製もしくはマリネ、サラダ、果物と手順良く、毒見をする。朝食の席で、王は侍従がどの様に食べ物を食べるかしばしばじっと見つめる。侍従の好物が何であるのか、自然と理解しているのは確実で、王が明らかに毒見の量よりも多目の量を取り分けてくれるのも、侍従の好物のオムレツと大好物の果物類は半分ほど侍従に食べさせるのも、王の心遣いのようなだ。

朝食には菓子パン類も供されるのだが「気に入ったのなら、お前が食べる」と言われる事も珍しくない。

食事中に飲む茶は、侍従が淹れる。無論、これも王のカップに注いだ上で、一匙だけ毒見する。

「毒見など面倒極まりないなあ。どうせならお前と一緒に食事をした方が、よほど気分が良いと思うのだが、それを口にする则老人どもがつるさいだろうか……」

王のお気持ちは有り難いが、恐れ多い。自分はただの侍従であるのだから。そのように若い侍従は感じている。

国王・1

「もっと、そのオムレツも食べよ」

そう命じると若い侍従は顔を一瞬赤らめて、それから静かにオムレツを口に運ぶ。桜色のくつきりした形の整った唇。薄っぺらでもなく、厚ぼつたいわけでも無い。確かにこの唇は少女のものだ。普通の男子なら髭の一本や二本、痕跡が見当たりそうなものなのだが、ほのかにバラ色のさす白いきめ細やかな肌の上にはまるつきり見いだせない。やはり、この侍従は少女なのだ。改めてロベルトは気品がある愛らしい顔をまじまじと見る。もっと髪を伸ばして高く結い上げ、最新流行のドレスを着せたらどうだろうか？ ふとそんな想像をしてみる。おそらく……自分の愛人の誰よりも目を引く美しさであろうと、ロベルトは思う。

仮にこの侍従はアンドレアス・ノイマンと名乗らせてはいるが、本人が幼いころの記憶があいまいなため、本来の名は主人であるロベルトも知らない。

そもそもアンドレアスはロベルトがまだ王太子であつた頃に、狩猟をしていて出くわした孤児だつたのだ。幾日もろくに食べて居なかつたようで、体中が針金のように痩せ細つていた。黒い瞳で見つめられて、見捨てる事など出来なかつた。馬に乗せて宮殿に連れ帰つたのだが、恐ろしく体が軽かつた。赤ん坊の死体を抱きかかえていたが、説得して土を掘り埋葬した。自分も飢え死に寸前というありさまだつたのに、赤ん坊をずっと抱えて来たらしい。後で聞けば、どうやら内乱状態の神聖帝国から黒い大きな森を抜けて、王国側に出了たらしかった。大人達は皆殺害され、住まいを焼かれたと言う。どの様な経緯が有つたのやら、事情は分からないが、ともかくも幼い子どもには過酷すぎる状況を生き延びたのは確かなように思われ

た。そのせいか記憶の一部があいまいになっており、自分の年齢が九歳だということは認識していたが、自分の名前はどうかやら本当に思い出せない様子であった。亡くなった赤ん坊は妹というわけでは無いようだった。死の直前の赤ん坊の母親から、連れて逃げて欲しいと懇願されたと言うのだ。

「だんだん、この子の泣く声が小さくなって、もう聞こえなくなっちゃったんだ。どうしよう」

そう訴える子供の髪は自分自身で切ったそうで、牢屋に入れられた罪人のように非常に短かった。短かっただけでなく、所々地肌がまだらに透けて見えるお粗末さであった。着ている服は男の子のものであったし、「僕」と自称していたし、仕草や言葉から、てつきり少年に違いないと思ってアンドレアスという名を与え、本人の希望もあって身近に置く事にしたのだ。

以来アンドレアスは行儀作法も武芸も学問も懸命に学び、仕事ぶりも熱心で手際も良い、なかなか優秀な侍従となったが、思わぬ事で少女であったことが判明した。

アンドレアスが十歳の年に、ロベルトは即位して国王となった。愛らしい侍従は懸命に務め、十二歳になるころには名実ともに王の側仕えにふさわしい人材に育ちあがっていた。それが……アンドレアスが十四歳を過ぎた頃であったか……真つ青な顔をして腹を抱えずボンにかなりの血が滲んでいる状態で寝椅子で転寝しているという状態にロベルトは遭遇してしまったのだった。急ぎ乳母のノイマン夫人に、医師を手配させた。

「この方はれっきとした女性で、初潮を迎えられたのです。病では御座いません」

その医師の報告を聞いて、ロベルトは自分のうかつさに舌打ちし

たい気分になったものだ。乳母のノイマン夫人はどうやらかなり以前から、小さな侍従の秘密に気付いていたという。引き取って以来アンドレアスの教育係で、親代わりでもあり、今では本当にアンドレアスの養母でもある関係なので、当然と言えば当然であつたかもしれない。

「陛下は御存知なのだとばかり思っておりまして」

そのように言つたノイマン夫人とは口裏を合わせ、ロベルトは侍従が実は女である事を今も知らないふりをし続けているのだ。

そのノイマン夫人は白髪になつても美しく優雅で忠実無比だが、無口で人の好き嫌いがはつきりしており、なかなか気難しい。だが小さな侍従の事は最初から可愛がつており、何くれとなく面倒を見てやつていたようなのだ。ノイマン夫人は戦争未亡人で実子も病で亡くし、天涯孤独の身の上であつたから、アンドレアスの正式な侍従就任に合わせ、ロベルトの「お声がかかり」で養子縁組をさせたのだった。従つて、今ではアンドレアスはノイマン夫人を「母上」と呼んでいる。

ノイマン夫人の協力も有つて、アンドレアスは男として貴族たちに認識されているのは間違いないようだ。熱心に学び、武芸の研鑽も怠らない。理路整然とした話しぶりも、颯爽とした身のこなしも上流の青年のそれであつて、女性には確かに見えないうとロベルトは思っている。女官達はアンドレアスを前途有望な美しい青年と見ているようで、時折付文を渡されているようだ。

「先ほどなかなか愛らしい女官見習いから、文を貰っていたようだが、どうする？」

面白半分にロベルトが問うと、アンドレアスは顔を赤らめ、生真

面目な調子でこう答えるのだ。

「僕は国王陛下に命を救って頂き、取り立てて頂きました。今はまだ十分に御恩返しも出来ていませんから、女性と付き合うなど言う気分にもなりませんし、その時間もございません」

なかなか負けん気も強く、四、五歳年かさの青年たちを相手に、剣でも馬術でも学問でも政策論争でも、一步も引かない見事な戦いぶりだ。まったく化粧気のない顔は凛々しい。それでも本当の男とは異なり、顔の輪郭も繊細で優しげだ。女にしては背が高いので、少し小柄な男にも見える……はずだが、一旦実は少女だと知ってしまつと、ロベルトの目にはどうしても男には見えなくなってしまうている。

食事をする時も、つい、年若い女なのだと言う意識が働く。だが、愛人とかなじみの娼婦のような相手とは勝手が違う。ロベルトには妹はいないが、いたらこのような感じであつたのかもしれないなどと思う。

「育ち盛りなのだからな、もっとちゃんと食べるのだ」

食事の際も、ついそのような事を口走ってしまふ。だが、どのようなだろう。胸元は特殊な下着で押さえ込んでいるらしいが、これからますます女らしい丸みを帯びた体が出来上がっていくはずなのだ。不自然な現在の状況をいつまでも続けさせて良いものかどうか、悩むところだ。このまま「アンドレアス・ノイマン」が成長するのを見たい気持ちが有る一方で、女として装わせた姿を見てみたい……とも思う。

だが、それにしても、この侍従の本来の名前は何であつたのか？ 気品有る優美な面差しは、とても名も無い庶民の血筋とは思えない。そういえば、養母となつたノイマン夫人の面差しとどこか似通

ったものを感じるが、本当の所、二人は赤の他人なのだろうか？
ロベルトが幼い時分に聞いたノイマン夫人の身の上話では、ノイマン夫人自身も王国の生まれではなく、黒い森の向こうの今は滅んだ神聖帝国の「ちよつとややこしい家」の娘だと言っていたことが有る。どうややこしいのかについて、その後尋ねた事は無いが、一度きちんと話を聞いておくべきなのかもしれないと、ロベルトは思うのだった。

国王・1（後書き）

誤字、見つけ次第訂正していますが……御指摘大歓迎です

ノイマン夫人・1

青年国王ロベルトの乳母であるノイマン夫人は、名をセシリアと言い、王国の貴族では無い。だが、貴族に準じた扱いを受け、王宮内では誰にも一目置かれる存在だ。戦死したノイマン夫人の夫は先代国王の信任厚い軍人であった。それも並みの軍人ではなく諜報工作の責任者であつたらしい。

ロベルトが身体壮健・眉目秀麗な青年であるだけでなく、善政を敷き、一度は傾いた王国の財政を立て直すような優れた国王となつたのは、生まれついていた素質以上にノイマン夫人の厳しくも献身的な養育によるところが大きいと広く認識されているのだ。

ロベルトは生まれながらの王太子であつたが、生母の王妃は産後の肥立ちが悪く、ロベルトが初めての誕生日を迎える前に亡くなつた。その、母親との縁が薄い跡取り息子の養育を、若い戦争未亡人で一人息子を亡くしたばかりのノイマン夫人に委ねたのは、先代の国王だつた。

「亡き息子が生きていたならばどう育てたか、そして将来王になる子供には何が必要か、常に意識して育ててほしい」

その先代国王の言葉は、ノイマン夫人の養育方針を決定づけた。母を失つた赤子と息子を失つた女は、たがいに寄り添うようにして瞬く間に強いきずなを結んだ。幾度か幼いロベルトは病に見舞われることが有つたが、ノイマン夫人の献身的な介護でいつも無事に乗り越える事が出来た。少なくとも先代国王はそうように語っていたし、人々もそれを認めていた。だが、ノイマン夫人としては「当たり前の事」をしただけだと思つていたので、先代国王の言葉はいささか面はゆいのだつた。

ロベルトが一歳を過ぎる頃から、ノイマン夫人は砂遊びをさせたのだが、砂は清潔なものを吟味し、庭師の手で丁寧にふるいにかけて、異物の混入が無い事を確認していた。最初の頃は自分で掘り返すより、庭師たちがあらかじめ作った山を突き崩す事にロベルトは夢中になっていた。二歳になって型抜き遊びをする頃になると、貴族や軍人・学者・豪商の家庭で同じ年か、少し年上の兄弟姉妹がいる健康で性格の穏やかな幼児をノイマン夫人が五人選び、一緒に砂遊びをさせた。幼い子供同士揉めると、ノイマン夫人は如何なる場合も相手の子供に謝らせたが、そうした場合は必ず「ロベルト様が王太子でいらっしゃるから、御身分に遠慮させたのです」と言い、砂遊びは中断させて子供たちを帰宅させるのだった。ロベルトは厳しく叱責される訳ではなかったが、自分のわがままで遊び相手が気分を害すると、楽しい遊びも止めになってしまふという事を幾度も体験して、四歳になる頃にはごく自然に遊び仲間に気配りが出来る子供になった。

仲良く遊んでいれば、ノイマン夫人が口をさしはさむ事はほとんど無く、ロベルトの自由にさせた。だが、遊んでいるロベルトの側で編み物や刺繍をしながら、常に目配りは怠らなかった。

砂遊びがしにくい晩秋から冬に掛けては、室内の床に白い大きな布を広げ、好きなように絵や模様を書くと言う遊びをした。やがてその布に陣地や道を書き、その上におもちゃの兵隊を置いたりして遊んだりもするようになった。あるいは紙芝居や絵本の類をノイマン夫人が読む、という事も有った。

ロベルトを含めた六人で、ほぼ毎日のように一緒におやつを食べたが、その際も「仲良く楽しく食べるにはどうすれば良いのか」をロベルトにノイマン夫人は考えさせたのだった。仲良しの子供の好みや、皆が楽しめる趣向について考える事が、マナーや社交術の基礎となった。

五人の子供たちはやがて、ロベルトの学友となり、有能な廷臣となって、今やこの国を支える人材に育っている。その五人が五人ともノイマン夫人には頭が上がないのだから、宮廷における夫人の立場が強固になって行くのは、自然な流れなのだった。

だが、どれほど権勢を握ろうとも、ノイマン夫人は昔と変わらず黒一色の飾りの無いドレスを纏い、亡き夫に贈られた指輪以外の装身具は身に着けない状態を保っている。王となったロベルトは長年の功績に対して、爵位と領地を与えようとしたが、それを固辞した。そのかわり可能な限り宮中に伺候し続ける事と、優れた軍人であった亡き夫の最期の地に、顕彰碑の建立を願ったのだった。

ロベルト国王は忠実なノイマン夫人の願いを受け入れ、他に終生の年金の支給と、身寄りのいないアンドレアスを養子に迎えさせる事を決めた。

「アンドレアスという名前は男の名だけれど、お前は女の子よね。本当の名前は何かというのかしら？」

国境近くでロベルトが拾った戦災孤児らしい子供は、身なりは男の子だったが、実は少女だった。ノイマン夫人は風呂の世話をしやったり、着替えの手伝いもしてやったから、アンドレアスが秘密だと考えている事は、夫人にとっては秘密でも何でも無いのだった。

「いくら考えても思い出せません。アン……何とかだろうとは思いますが、その名前を呼んだはずの両親の記憶がはっきりしないのです」

ロベルトが連れて来た最初の日のアンドレアスの髪型は、ところどころムラになって地肌が透けて見えるようなひどいものだった。更には左のこめかみから後頭部にかけて比較的新しい傷があった。どうやらその傷は自然に塞がっていたようだったが、自分の名前を

覚えていないのが本当だとすると、怪我はかなりひどいものであったのだろう。もしかしてこの少女は、何かの事件なり事故なりに巻き込まれた被害者なのかもしれないとノイマン夫人は考えている。

というのも、ノイマン夫人自身が複雑な出生の秘密とやらを抱え込んでいたようで、幾度か理不尽にも殺されかけたのだ。それを避けるには他国に逃亡するしかないという悟り、親切な猟師の老人の手引きで王国側にやってきたのだ。薬草取りの老婆の小屋で厄介になつていた所、負傷したマウリッツ・ノイマンを救った事が機縁となり、帝国からの密入国者であったセシリアは軍人の妻となり、晴れてセレイア王国の国民となつたのだ。

五年余りの結婚生活は幸せであつたし、夫と息子を亡くした後は一心に世継の王子の乳母として務めていたので、生まれた土地のことなど考えたことも無かつたのだが……自分とどこか面差しの似たアンドレアスを引き取つて以降、ノイマン夫人は自分自身の遭遇した理不尽な災厄について、あらためて考える事が多くなつた。

亡き夫マウリッツは、セシリアは生国である神聖帝国の皇族だった可能性が高いのではないかと推理していた。神聖帝国は歴史ばかりがやたら長かつたが、セシリアの生まれた頃には建国当時の勢いはとうの昔に無く、領土も十分の一以下になつてしまつていた。統治者は皇帝と呼ばれていたが、実態は小国の王と言つて良い。だが他国の王家よりうんと家柄が古く、由緒正しいという事を大いに誇つていた。「いた」というのは、セシリアがマウリッツ・ノイマンと結婚して以降になるが、深刻な帝位継承をめぐる争いが起き、その結果近隣の諸国の介入を招き、内乱がおきて、結局は国が滅んでしまつたのだ。

夫は戦死する寸前まで帝国の皇族の行方について調査していたようだ。どうやら先王の指示であつたらしい。夫が亡くなり生まれた国が滅び、調査を命じた先王も亡くなつた。その詳細な報告書は夫の生前のままの状態の書斎にしまつてあるが、セシリア自身が目

を通したことは一度も無い。

侍従・2

若い侍従が敬愛する国王陛下は独身男性である。それも思い切り魅力的な……

皇帝の位を巡る争いが引き金となつて、隣国であつた神聖帝国は長い内乱状態に入り自滅した。侍従にとって亡んだ神聖帝国は生まれ故郷のようだが、幼いころの記憶を失っている所為か特に何も思う事は無い。それでもこのセレイア王国に逃げてきた自分とも多少なりとも縁がつながっているのかもしれない旧帝国の人々が、この国で受け入れられているのは、侍従にとっても嬉しい事だった。

「帝国の農奴制は良くなかった。あれだけでも国が亡ぶのに十分な理由になる」

そんな王の言葉を深く理解できたわけでは無いが、真面目に働く農民は正当に評価されるべきだし、きちんと一人前の国民として扱うべきだと言う王の考えは、文句無しに正しいと若い侍従には思われた。

神聖帝国が滅んで、その国土は隣接する四つの国家に分断され吸収された形だが、一番広い面積を取りこんだのはロベルトが治めるセレイア王国だ。亡き先王もロベルトも隣国である神聖帝国の皇室のお家騒動に関わるのを意識的に避けてきたが、神聖国内の二つの勢力が争って自滅して以降は国境線に軍を張りつかせ、流入してくる避難民を保護した。すると棚ボタ式に領土が転がり込んで来たのだ。他の三つの国はセレイア王国よりはるかに国土も狭く、国民も少なく、したがって軍事力も小さい。ましてや神聖帝国の深刻な内紛を知って以来、ロベルトは避難民の流入に備えていたので、当然の帰結と言えなくもないのだった。

そうした先を見通し、慎重に確実に計画を実行する力も、ロベルトが「名君」とされる理由の一つなのだろう。若い侍従は、かつての帝国の農奴であった人々が、希望を持って働き、その子供たちが学校に通って熱心に読み書きを習う様子を見て、非常に感動していた。ロベルトはしばしば若い侍従を伴い、忍びで日帰り可能な範囲で各地へ視察に出ているので、そうした様子も直接見聞きできたのだった。そうした視察の折は、主とゆつくり馬を並べて行く事が許される。若い侍従には非常に幸せな時間だ。

「僕は陛下のお傍にお仕え出来て、本当に幸せです」

「そうかそうか」

「本当です」

「別に嘘だなどと、思っていない。だが、お前が褒めるほど自分が立派な王だとは思えないな」

陛下は御自分に厳しいのだ。だからこそ、この方は名君でいらっしやるのだ……そう侍従は受け止めた。都に入り、夕日を背に受けて王宮の秘密の門にたどり着くまでが、ほぼ二人で過ごせる時間だ。もっとも、隠密に王を警護するものは要所要所に配置されているはずなのだ。

「神聖帝国が失われたという事は、東方の国々にも伝わっているだろう。歴史が古いだけに帝国は、遠い国々にもその名を知られていたからなあ……」

馬にのんびり揺られながらも、王が難しい顔をなさっているのが気になる侍従だった。

「何か御心にかかる事が、御座いますか？」

「……我が国が剥き出しの形になってしまったのだ。緩衝地帯を失ってしまったと言っべきか」

「ムジープ大君主国の事でしょいか？」

「ああ、そうだ」

ムジープ大君主国はるか東方の砂漠地帯に起こった国で、その荒々しく強くすばしい騎馬軍団は各国の恐怖の的だった。実際、近隣諸国に積極的に戦いを仕掛け、ここ百年かその内に国土を大いに広げていた。今やその西の端は、河一つを挟んで旧帝国の地域と境を接するまでになっている。言語習俗がセレイアを中心とした西大陸の国々とは大きく異っており、こちらの常識はあちらの非常識と言つ具合で、非常に付き合にくい相手なのであった。

「攻め込んでくるでしょうか？」

「万幸、大君主の一言だけですべてが決まると言う国がらしいかなあ……旧帝国が行っていたと言う奴隷の貢納などという事をする気は全く無いが、機嫌をむやみに損ねるのも賢くないだろう」

セレイア王国では奴隷制度が廃止されて久しいが、旧帝国では皇族・貴族以外は国民の大半が奴隷状態に置かれていた。ムジープ大君主国には様々な地域から奴隷が運び込まれ、活発に取引されているという噂は、このセレイアにも届いている。旧帝国は軍事大国であるムジープを恐れ、定期的に奴隷を貢納すると言う屈辱的な条件も受け入れて機嫌を取り結んでいたようだ。大君主国のハレムでは白い肌で容姿の整った女奴隷が多数、必要とされているらしい。

これまでセレイアと大君主国との間に正式の外交関係は存在しなかった。国境を接していなかったから、互いに必要を感じなかったというのが正しいだろうか……と、侍従は理解している。

「近頃、大君主は非常に不機嫌なのだそうだ」

ロベルトはそう言うと、ため息をついた。セレイアの諜報網はそれなりに優秀であるとは侍従も理解していたが、遠い大君主国の主の機嫌まで承知しているとは、さすがに驚きだった。

「なぜでしょうか？」

「大君主のハレムには寵を受けた女が五十人以上いるらしいが、一番気に入りの女が生んだ娘が行方不明なのだそうだ。どうやらさらわれたらしい」

「大君主は様々な国を滅ぼしたようですから、恨む者は数知れないでしょうね」

「それはそうなのだが……その娘が西大陸のどこかに売り飛ばされたと言う情報が有るようだ。困った事に、大君主はその情報をかなり真剣に信じ始めているらしい」

「近頃熱心に大君主国の言葉を学んでおいでなのは、その事と関係りが？」

「外交交渉で避けられる戦争は避けたいからな」

正式に対等な外交関係を結びたいとロベルトは考えているようだ。

「隣同士になりましたから、どうぞよろしく……ではなあ、どうもきつかけとしては弱い。だが、挨拶一つしない内に、互いに不信感を募らせ、緊張関係になるのは非常にまずい」

「仮にその娘が西大陸のどこかにさらわれたとして、探し出して大君主のもとに送り届けたら、大いに感謝されるではありませんまいか？」

「おお、そうだな。それが良い手だな」

「ですがその娘が見つからなかったり、あるいは殺害されていたりしたら……」

「そうよなあ……まだ、戦争は避けたい。新型の銃の配備には、当分時間がかかるし、改良型の大砲もまだ実用段階とは言い難い。現状では投石器と威力は大差ない、いや、あれでは投石機の方がマシかもしれん」

「では……名馬をお贈りになっては？」

「ほう、それは名案だな。何しろ……」

王は何かを話しかけて、急に黙った。それが何なのか、なぜなのか、まだ若い侍従には読み取れない。だが、尊敬する王が自分の案を検討に値すると思つて下さったようだと言うだけで、十分に幸せなのだった。

近頃、ロベルトは気が付くと若い侍従の顔を見詰めている事がある。美しい異性の顔に魅かれるのは、当然と言えば当然なのだが、愛人たちの中には人並み優れた容姿の者もいるし、売れっ子の高級娼婦は若い貴族や豪商たちに崇拝されるほど優雅で美しかったりする。

侍従の美しさは未完成でみずみずしく繊細で、ベッドを共にする女たちの華やかさ、あるいはある種の逞しさとは無縁だ。

今日はこうして侍従を連れて、都に一番近い開拓地を真面目に視察したが、昨夜は愛人の一人と強かに飲み、大いにベッドで乱れたのだった。女は貧しい漁師の娘で「魚臭い田舎で埋もれるには、あまりにもつたいない」自身の美貌で成り上がってやると決意して都にやってきて娼婦の見習いとなり、それからロベルトの目に留まって愛人となった。馬鹿正直で、気が良い所が有り、一流どころの娼婦になってやっていくには、芸事も学問も大いに修練が不足している。そんな女だ。

「あたしは宝石が大好き」

「よしよし、正直な奴だな。ならばこれはどうだ」

機嫌を取り結ぶために、昨夜は大粒のダイヤを連ねた首飾りをやったのだった。

「まあああ、でっかいダイヤがいっぱい！　ありがとう、陛下！　大好き！」

体中で喜びを表し、大きな音を立ててロベルトにキスをした。恐らくノイマン夫人なら眉を顰め、門閥貴族たちなら呆れかえる様な粗野な言葉遣いだが、陽気で嘘が無い。贈り物をやると、現金な程反応が違い、殊に金額の張る品を受け取った時にはロベルトの望む

ままに淫らに奔放に乱れまくる。彼女にとって、こうした振る舞いもある種の仕事なのだとロベルトは思っている。

「お前は本当に良い体をしている」

「陛下は色男だし体もすごいから、あたし、お役御免になったらこの世界でやって行けるかなあ」

「まだ稼ぐのか。あれだけ色々やっただろう。田舎で商売でもやったらどうだ」

「そっか！ そうね！ そうしよう」

こんな会話も交わした事が有る。互いに仮初の縁だと認識しているのだ。それでも、もし子供が出来た場合の事を考えて、相手が娼婦の場合は年単位で買い占める格好を取っている。避妊法は色々あっても、どれも確実ではないからだ。もし子ができればロベルトが引き取り、将来は貴族に列する事になる。庶子が王位を継げないのは、この国の建国以来の祖法だから、それも申し合わせの内だ。

ロベルト自身で色々考えてみた所、愛人やなじみの娼婦は皆、正直者というのが共通した特徴であるような気がする。ロベルトは国王と言う立場上、見え透いたお追従やら本音とはまるで違う「社交辞令」と言う奴を見聞きする機会も多い。それだけにベッドの中では正直な言葉しか聞きたくない。そんな気分の表れなのだろう……と、自分では思う。

このセレイア王国では奴隷制を廃して久しいが、人身売買が全く存在しない訳では無い。近頃は法の取り締まりが厳しくなっており、娼婦も自分の意志でなる者が増えたが「親兄弟の借金のカタに売り飛ばされて」という者がいなくなっただけでは無い。それでも職場が国内の、国が認めた地域の娼館なら、べらぼうな金額の借金を背負わせる事は無いし、衣食住や衛生に関する決まりもおおむね守られている。

問題は外国相手の場合だ。ロベルトは実際に現場を見た事が無いが、より高額 of 資金を得るために大君主国に娘を売り飛ばす者もいるらしい。

「肌が白くて滑らかで健康で、まだ男を知らない若い子が良いんですって。向こうで宦官が教育係になって、あちら式の行儀作法やら楽器の演奏やら踊りやら仕込むらしいの」

そんな話を教えてくれた娼婦もいた。器量の良い少女一人当たり到大君主国側の奴隷商人が払うのは、あちらの金貨で千枚が相場らしい。大君主国の金貨は純度が高く、正式の外交関係が無いこのセレイア王国でも十分通用する。買い取られた少女たちは二年ほどの教育期間を経て、ハレムにおさめられる。その際に大君主のハレムを監督する宦官長が奴隷商人に支払う金額は、一人当たり平均で金貨五千枚ほどになるそうだ。

「差引き四千枚分の取り分か。幾ら手間暇かけたとは言え、一人当たりの経費は二年で金貨五十枚もいかないだろう。奴隷商人は儲けると聞くが、なるほど凄いのだな」

「でもね、女の子を売った家族に行く金貨はせいぜい百枚かそこらよ。中には十枚でごまかされちゃったなんて事もあるみたい」

仲介役の娼館もかなりぼろもうけをしているのだ。奴隷の売買は当人同士が納得していても違法行為で、ロベルトも厳しく取り締まらせている。そこで近頃は法による処罰の対象となるセレイア王国籍の少女は避け、まだ国籍を得ていない避難民や、他国の少女がもっぱら売買されているらしい。

「他国の少女なら、黙認なさるべきでは？」

そんな事を言った外交官もいる。大君主国のハレムでは白い肌の美少女は必要不可欠な存在で、その供給をあまりに厳しく取り締ま

るとロベルトが憎まれるから危険だと言うのだ。何と歴代の大君主は、そうした白い肌の奴隷の腹から生まれており、見た目はこの西の大陸の貴族と変わらないのだと言う。これまでの大君主たちは生母と同じ生国の女を好む傾向にあり、その意味でも迂闊に手を出せば感情的に恨まれる恐れが強いらしい。

「ムジブ大君主国は独自の暗殺専門部隊を養成しております。こう申しては何ですが、娼婦や身分低い女と王宮の外でお会いになるのは危険だと感じます」

そう、苦言を呈した情報将校も居た。

奴隷商人に暗殺専門部隊……知れば知るほど恐ろしい相手だ。その恐ろしい国家の最高権力者を怒らせた者は誰なのか？ 行方不明だと言う大君主の姫が、侍従の言うように既に殺害されていたら、実に厄介だ。だが……確かに、名馬を贈るのは悪くはないかもしれない。

「ほう、それは名案だな。何しろ……」

何しろ、男を知らない肌の白い美少女の値段は金貨五千枚なのに對して、戦場をもとめせず疾駆する駿馬は金貨一万枚するらしいから……と言いかけて、無垢な侍従の笑顔を目にした途端、言葉が止まった。何やら汚らわしい嫌な話で、この侍従に聞かせるにはふさわしくない。つい、そう思ってしまったのだった。そして昨夜の自分の行動を気恥ずかしくも感じたのだった。そのような事を感じたのは、全くの初めてであったので、ロベルトは自分で戸惑ってしまった。

自分は穢れきった大人で、この無垢で清らかな侍従に信頼され尊敬されるにふさわしい男ではないのだ。そこまで考えてから、そのような事を考えた自分自身に対して驚いた。

「もうすぐ都ですね。お帰りになったら、お茶になさいますか？それともお夕食に？」

「まずは、茶を飲もうか」

「その後、お出かけですか？」

愛人の所で寝るときは、夕食を取らずに出かけるのが常だった。

「いや、ゆつくり夕食を食べて、風呂に入って大人しく寝よう」

「はい」

侍従は、明らかに嬉しそうだ。考えてみればこの所、一緒に夕食を食べていなかった。これほどに喜んでくれるなら、もつと一緒に食事をしよう。そんな風に思わせるには十分な愛らしい笑顔だ。

「献立は何だろうな」

「はい。料理長自慢の季節の野菜のポタージュと牡蠣のグラタンで初めまして、メインの魚は鱒で白ワイン風味のクリームソースで…

…」

延々と細かい説明がつく。鱒の後はロベルトの大好物の鴨のローストのようだ。侍従は名人堅気の気難しい料理長に気に入られている。このアンドレアスの前任者が毒見をやっていたころは、料理長がしょっちゅう怒声を発していたらしいのだが、今は当時の事が嘘のように穏やかなのだ。若い侍従はロベルトの好みの料理を、最高の状態で食べさせる事で頭が一杯らしい。その表情を見ているだけで、ロベルトは幸せな気分になれるのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2197ba/>

大きな秘密、小さな秘密

2012年1月7日07時30分発行